

ブレーマーハーフェン 志賀トニオ氏

ドイツの11月は冬の始まり、そしてクリスマスの足音が聞こえてくる季節です。スーパーマーケットではクリスマスのお菓子やアドヴェントカレンダーが売られ、街中でもみの木が数メートルおきに立てられ、クリスマスマーケットの為の小屋が至る所に立てられ始めています。さて、劇場のプログラムはシーズン開始から盛り沢山でした。音楽部門(Musiktheater)はトゥーランドットのプレミエで始まり、今月始めにマイ・フェア・レディのプレミエがありました。私はそれぞれの作品にコレペティトーアとして参加し、多くの稽古でピアノを弾いたり指揮をしたのですが、今シーズンはこれらの作品と並行してバレエ部門の演目であるロミオとジュリエットの代振り(第2指揮者)を任せされました。今回はその中身について詳しくお伝えしたいと思います。

プロコフィエフ作曲のロミオとジュリエットはバレエ団にとって大変重要なレパートリーで、音楽的にも内容が濃く、指揮者としていつか取り組んでみたいと夢見るような作品です。今回のバレエ部門の公演も、本来であれば第1カペルマイスターが受け持つ可能性があったにもかかわらず、音楽監督自らが希望して指揮する事になりました。そして計10公演のうちの2公演の代振りを私に託してくれたのは特別な事だったのです。

この作品には不思議な縁があり、初めての関わりは私がまだ20代前半の日本にいる時でした。当時私は音大の学生で、その学業の傍ら、海外からの引っ越し公演のエキストラの仕事をしていました。その内容とは、オペラやバレエ公演で歌を歌ったり踊ったりしない脇役(黙役)を演じる仕事で、警官、貴族、盗人、戦士等ありとあらゆる役を演じました。世界の一流と言われる団体(ミラノ・スカラ座、バイエルン州立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場等)と直に触れ合える貴重な機会でした。

ミラノ・スカラ座では運命の力に戦士として参加し、当時音楽監督であったリッカルド・ムーティの指揮を毎日舞台上から見る事ができました。その舞台では積まれた土嚢を蹴飛ばして崩すように指示されていたのですが、本番の時に力強く蹴りすぎて土嚢が必要以上に散乱し、その時の大柄なイタリア人のテノール歌手に歩くスペースがなくなったと怒られたのをよく覚えています。

ベルリン国立歌劇場ではワルキューレとジークフリートに参加し、ジークフリートでは冒頭に熊が出てくる有名な場面があるのですが、その着ぐるみが私のサイズにピッタリだったので、私がやる事に。その時の演出では熊が檻の中に入っており、その檻が空中に数メートル引き上げられる事に。大変ドキドキしながら演じましたが、この時もダニエル・バレンボイムの指揮を見たり、ワルトラウト・マイヤー等の一流の歌手を間近に聴く事ができました。そしてイギリスのロイヤルバレエ団が来た時にはロミオとジュリエットに盗人役で参加しました。当時バレエ界のスターであった熊川哲也さんがプリンシパルで、本番の前日に情熱大陸というテレビ番組で彼の事が紹介されていて、その人と同じ舞台に立っている事に感激したものでした。

次にこの作品と関わったのは先シーズンの事でした。これはこちらの便りでも取り上げた内容なのですが、定期演奏会の為の一回目のオーケストラとの稽古にゲストの指揮者が来れなくなり、曲が難しいからその稽古を私が代わりに指揮して欲しいと依頼がきたのでした。そしてその時の作品がこのロミオとジュリエットの第2組曲だったのです。バレエ版からの抜粋なのですが、重要なテーマを数多く内包しています。さらにもこの時は本番直前の通し稽古の時に同僚が体調を崩して、私が急遽ピアノパートも受け持ったので、音楽が体の中にしっかりと浸透していました。

バレエ公演の代振りはオペラとは違う難しさがあり、まず第1に本振りの指揮者と似たテンポにしないと踊れなくなってしまう事。第2に稽古でピアノを弾くわけではないので、余暇の時間に多くの時間を費やし音楽を体に浸透させなければならない事です。その点に於いては昨シーズンの経験が大変役に立ちました。それでも第2組曲には入っていない音楽も沢山ありますし、とても難解な曲だったので、トゥーランドットとマイ・フェア・レディの稽古と並行して準備をするには苦労しました。お陰様で1回目の本番は大成功!忘れられない本番となりました。2回目は11月下旬です。



ジュリエットが死んだと思い込み
絶望するロミオ



両家の決闘の場面